



天文学者の日々

谷口義明 著

創風社出版 1,470円 222頁

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆

昨年秋頃、大学の図書館の天文書の棚を眺めてたら、この本を発見。「え、谷口さん、こんなの出してたの？」これはぜひとも買って読まねばと思って、さっそく購入。6月には出ていたようですが、全く気づいてませんでした。

本書をひとことでいうと「天文学者の生態がわかる1冊」と言えます。皆さんも「天文学者って何をやってるの？」と聞かれて、つい硬い答えをしてしまったか、答えに窮したことはありませんか？ そんなとき、この本から何かヒントが見つかるかもしれません。

筆者の谷口義明氏の学会発表を初めて見たとき、ウルトラ兄弟のスライドを出していて度肝を抜かれました（まだOHPの時代です）。その後も「ウルトラの星」というキーワードで発表を何度か耳にしました。筆者とは研究分野も違うのに、なぜかいろんところで接点があり、なんだかんだと直接お話す機会もあり、私の前職のかわべ天文公園でも天文教室の招待講演に遠方をはるばる来ていただきました。そんなこともあり、今回はそのときの感謝を込めてこの書評を書いてみました。

本書は筆者の地元の新聞の連載をまとめたもの。全80話のエッセイから構成されています。出版元の創風社出版も愛媛県の出版社。論文の話、学会発表の話から、大学の講義、観測、共同研究、国際会議の話などなど。2009年の世界天文年の話も。文字どおり「天文学者の日々」が満載です。

この中から、わたしが勝手に選んだいくつかのエピソードを元に本書を紹介すると…

第13話「本を旅の友に」 随所に読書の話題が豊富で、まるで氏の本棚を見てるかのよう。実際、本棚の写真も登場します。また、宇宙の専門書だけでなく、ミステリー小説や教養書を旅の道中に山ほど読む話が登場し、その旅行かばんの写

真まで登場するのが面白い。谷口氏が執筆した本の話題も多いです。まあ宣伝の意味合いもあるとは思いますが、何がきっかけで、その本を書くに至ったがわかって興味深いです。

第17話「コスモスが町にやってきた」 国際会議・国際共同研究の話題が多いのも特徴です。特に、谷口氏がかかわっているコスモス（宇宙進化サーベイ）プロジェクトのことは何度も登場しています。松山でコスモスの会議を開催し、世界中から大勢の参加者がやってきて、会議はもちろん松山の街や温泉を楽しんだことを紹介しています。

第44話「わたしが昆虫少年だった頃」 最近、天文学者が書いた一般向けの本には、筆者の学生時代の話や、なぜ天文学を志すようになったかに触れるものが増えています。私が読んで中では「すばる望遠鏡」家 正則（岩波ジュニア新書）、「ALMA電波望遠鏡」石黒正人（ちくまプリマー新書）がそう。本書では、筆者が小さい頃は昆虫少年だったエピソードや、北海道の実家から夜行列車で大学を往復した話など、少年時代・学生時代が伺える話が散りばめられています。天文学者のこんな話を知りたい人は多いはずです。

人物の写真が多いのも特徴で、本人の写真はもちろん、学部学生や大学院生、大学関係者、共同研究者、外国人研究者など。これらの写真が、筆者を含めた愛媛大学の天文コミュニティの活躍をいきいきと伝える役割を果たしています。今後、このような各大学の天文事情や活躍が伝わる本がもっと増えればいいと思います。

あれ、そういえば、この本の中には「ウルトラの星」が全く登場しなかったような…

矢治健太郎（国立天文台）